

＜シンポジウム 11＞プリオン病の最新トピックス

オーバービュー

座長 東北大学医学系研究科創生応用医学研究センタープリオン蛋白研究部門 北本 哲之
金沢大学大学院医学系研究科脳老化・神経病態学 山田 正仁

(臨床神経, 49 : 935, 2009)

本シンポジウムでは、北本先生が「プリオン病研究の 50 年」、山田先生が「プリオン病サーベイランスの現状と成果」、志賀先生が「プリオン病の臨床と遺伝子異常」、堂浦先生が「プリオン病の治療予防開発」という演題で講演した。

「プリオン病研究の 50 年」では、ニューギニアの地方病であった kuru が感染性の疾患として証明され、その疾患がプリオン病と呼ばれるにいたった経緯の研究を紹介した。また CJD が感染する疾患であることが明らかになった時点で神経内科医が危惧した通り、ヒト(ないし動物)からヒトへのプリオン感染がおこってきた 50 年の歴史と更に今後おこりうる新しいプリオン感染の危険性が紹介された。

「プリオン病サーベイランスの現状と成果」では、我が国ではじめて本格的な神経疾患のサーベイランスが紹介され、我

が国の医原性プリオン病の硬膜移植例の臨床調査の結果、1 例ではあるが vCJD 症例、欧米各国と比較した遺伝性プリオン病の我が国での特徴などが紹介された。また、今後問題となるであろう、CJD 発病前後の脳外科等の手術による 2 次感染への危惧が紹介された。

「プリオン病の臨床と遺伝子異常」では、我が国で頻度の高い codon 180 変異, codon 102 変異, codon 200 変異, codon 232 変異の症例が紹介され、注目すべき事に同じ変異であるにもかかわらず、ことなった臨床経過をとる症例が存在することを紹介した。

「プリオン病の治療法・予防法の開発」では、現在開発中の新しい薬剤に関して、その治療効果と予防効果が紹介され、さらにその作用機序に関しての紹介があった。